



ワークキャンプのサービス・ラーニングとしての意義と課題

堤, 拓也

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2023-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8539号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482287>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

氏名	堤 拓 也
専攻	人間発達専攻
指導教員氏名	松 岡 広 路

論文題目（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）

ワークキャンプのサービス・ラーニングとしての意義と課題

論文要旨

サービス・ラーニングは、社会課題の解決と大学における専門教育の結合を意図して生み出された実践プログラムである。そのプログラムの特徴は、構造化された学習活動とボランティア活動を組み合わせたところにある。しかし、サービス・ラーニングの先行研究においては、実践のなかで取り組まれるボランティア活動の形態を論じたものはほとんど存在せず、ボランティア活動を通じた参加者の学びのプロセスは、いわゆるブラックボックスとなっている。

サービス・ラーニングにおける学びを十全に捉えていくためには、ボランティア活動における学びのプロセスを明らかにし、そこでの学びのプロセスが、学習者にとって、そして、現代社会にとって、どのような意義をもちうるのかという観点から研究を進めていく必要がある。

本研究では、サービス・ラーニングにおけるボランティア活動の一形態として、ワークキャンプと呼ばれる実践に注目する。ワークキャンプは、第一次世界大戦の戦禍が残るフランスのヴェルダンにおいて、Pierre Ceresoleらによって行われた国際ワークキャンプを起源とする実践である。現在、ワークキャンプは、社会福祉協議会、NPO・市民団体、大学、学生団体といった多様な主体によって取り組まれている。こうした取り組みは、現代的課題および若者の現状や欲求に応じた新しいワークキャンプを再創造しようとしているものだと考えられる。

本研究の目的は、ワークキャンプのサービス・ラーニングとしての意義と課題を明らかにすること、すなわち、サービス・ラーニングにおけるボランティア活動の一形態としてのワークキャンプの学習論のもつ意義と課題を考究することにある。

本論文の第1章では、サービス・ラーニングに関する文献研究を通して、本研究におけるサービス・ラーニングの概念規定を行った。文献研究の結果、サービス・ラーニングは、公民権運動、ベトナム反戦運動、貧困との闘いなど、既存の価値観が大きく揺らぐ1960年代のアメリカにおいて、互惠の原理に基づいて生み出された実践であり、そこでは、サービス・ラーニングに関わるあらゆる人々が相互にエンパワメントし合うような関係の構築が目指されていたということが明らかになった。本研究では、Barbara Jacobyによるサービス・ラーニングの定義を補足・拡張し、以下のような概念規定を行った。

サービス・ラーニングとは、学生の学びや成長を増進するような意図を持って設計された構造的な機会に、学生が人々や地域社会のニーズに対応する活動に従事するような経験教育の一形式である。同時に、学生がコミュニティの抱える現実的な課題解決を通して、その活動に関わるあらゆる人々、組織、コミュニティのエンパワメントを志向するコミュニティ・エンパワメントの一形式でもある。省察reflectionと互惠reciprocityは、サービス・ラーニングのキー概念である。互惠的な関係は、対話と意識化によって構築される。

第2章では、国内の大学におけるサービス・ラーニングを研究対象とした先行研究のレビューおよび事例分析を通して、その傾向と課題を整理し、これからの大学教育に求められるサービス・ラーニングの構造を示した。まず、先行研究のレビューの結果、サービス・ラーニングの学習面に注目した研究に比べ、サービスの質や形態を問う研究が少ないという傾向が見出された。また、大学のカリキュラムの中でサービス・ラーニングを実施する上での時間的制約が課題とされていた。次に、こうした課題を踏まえ、国内の大学で取り組まれてきたサービス・ラーニングの事例を分析した結果、広島経済大学で行われていた「興動館プロジェクト」や、大分県立芸術文化短期大学でサービス・ラーニングの実践現場として活用されていた「自分戦略デザイン大学」のように、大学の授業とは独立したところに学びの場が構造化されていることが、大学のカリキュラムとの接合の自由度を高める上で重要な点であることが見出された。

第3章では、学びを内在するボランティア活動として、学生セツルメントおよびワークキャンプの先行研究を取り上げ、両者の学習論の類似性について検討するとともに、今後の研究課題と展望について整理を試みた。まず、両者に類似する学びの特徴として、(1) 地域および社会の課題について頭で考えるだけでなく、地域における具体的な活動や交流から掴んでいこうとするプロセス、(2) 学生自身が、多層多元的な活動を通して、自分はどんなことに関心があり、どんなことを学びたいのか、どんな生き方をしたいのか、ということについて、様々な悩みや葛藤を伴いながら意識化していくといったプロセスが重視されてきたという特徴が見出された。そして、学生ボランティアにおける学習論研究の課題として、戦前・戦後の学生ボランティア活動における学びがその後の人生にどのような影響を与えたのかという観点からの分析、ボランティア活動における参加者の〈ゆらぎ〉を観点とした実証研究、ボランティア活動における学びを長期的なものとして捉え、活動後の多様な経験や出来事の影響を視野に入れた総体として探究していく必要性が見出された。

第4章から第6章では、ボランティア活動における参加者の〈ゆらぎ〉を観点とした実証研究として、筆者が10年来参与観察を続けるワークキャンプにおける参加者の学びを分析した。第4章では、まず、学習者の学びの契機となる〈ゆらぎ〉について、以下のように概念規定した。

学習者の学びの契機となる〈ゆらぎ〉とは、学習者がこれまでに身につけてきた思考・行動様式および基盤（すなわち「生活世界」）が不安定な状態になること（「ジレンマ」の感覚生起）であり、それは、一定の時間の中で、学習者の思考・行動様式および基盤に関する批判的自己省察（「自己検討」「批判的評価」「深層的なゆらぎ」）や、学習者に影響を与えてきた社会様式への気づきを伴う場合もある。

次に、活動中の参与観察およびインフォーマル・ヒアリングを踏まえ、ワークキャンプ参加者8名へのインタビュー調査を行った。そして、そこで得られた参加者の「印象に残っていること」を25個のエピソードとして整理し、ワークキャンプにおける多様な学びの契機と様態の描出を試みた。その結果、ワークキャンプには、参加者の迷いや葛藤からなる多様な学びの契機、すなわち、多層多元的な〈ゆらぎ〉の生成場面が存在することが見出された。

第5章では、ワークキャンプにおける〈ゆらぎ〉の生成プロセスを、より構造的に把握するため、ワークキャンプ初参加者の〈ゆらぎ〉の分析を試みた。その結果、ワークキャンプは、ボランティア活動そのものに関する概念の〈ゆらぎ〉に加え、青年期の特徴とされる「心理・社会的危機」に関連する多様な〈ゆらぎ〉が生まれる実践として意義があるのではないかと、また、ワークキャンプには、多層多元的な学習構造が内在・外在しており、特に、参加者の行動場面の拡張を促す〈三者関係の相互作用〉が重要な意義をもつのではないかという仮説が得られた。

第6章では、より長期的な観点からワークキャンプ参加者の学びを捉えるために、ワークキャンプに複数回参加しているメンバーの学びについて分析した。その結果、スタッフやディレクターといったワークキャンプの運営に近い立場で参加しているメンバーは、活動中に〈ゆらぎ〉を受け止める余裕がなく、〈ゆらぎ〉を意識的あるいは無意識的に留保する状況が生じている可能性が見出された。そして、〈ゆらぎ〉を受け止め、意味づけていくプロセスとして、スタッフやディレクターといった役割経験を積み重ね続けるだけでなく、一度、そうした役割から解放されるような〈まなびほぐし〉のプロセスが重要な意義を持つのではないかといった仮説が得られた。さらに、こうした〈まなびほぐし〉を促進するための具体的な方法として、複数回のワークキャンプに異なる役割をもって参加したメンバー同士による相互のインタビュー（ピア・インタビュー）やワークショップ、あるいは、異なるフィールドのワークキャンプに異なる役割をもって参加することが有効なのではないかといった仮説が得られた。

第7章では、ワークキャンプの学習論として〈緩やかで断続的なゆらぎ〉という概念を示し、そうした学習論をもつワークキャンプのサービス・ラーニングとしての意義と課題について考察した。〈緩やかで断続的なゆらぎ〉は、ワークキャンプ参加者が、当該ワークキャンプの最中あるいは事後直近のプログラムではなく、一定の期間を空けて、その役割から解放された状況下において〈ゆらぎ〉を意味づけていくプロセスにおいて生じる一連の〈ゆらぎ〉のユニットである。〈緩やかで断続的なゆらぎ〉を特徴とするワークキャンプは、ワークキャンプへの多様な立場での参加を可能にする〈多層性〉、対話的な関係によって担保される〈多声性〉によって促進される〈ゆらぎの相互作用モデル〉と捉えることができる。こうした学習論のもつ意義について考察を行った結果、他者との相互作用のなかで〈ゆらぎ〉を受け止めることによって、ワークキャンプ参加者のみならず、実践に関わるあらゆる人々に〈ゆらぎ〉の共振を起こし、金子郁容のいうバルネラビリティ（弱さ、攻撃されやすさ、傷つきやすさ）を互いに高め合うこと、すなわち、互惠的な関係を構築するためのレジリエンスを高めていくことに、ワークキャンプのサービス・ラーニングとしての意義があるのではないかという結論を得た。

本研究の今後の展望と課題として、まずは、本研究で得られた知見を、大学教育におけるサービス・ラーニングの発展に生かしていくことが考えられる。急速に移り変わる現代社会において、大学教育に求められる役割はますます大きくなっている。そもそも、サービス・ラーニング自体が、大学の専門教育のあり方を問い直す試みから生み出されたものであったが、大学で教育について学ぶ学生もまた、サービス・ラーニングを通して、既存の教育の理論や実践を

捉え直していくことが求められる。すなわち、省察と互惠を鍵概念としたサービス・ラーニングを大学における専門教育、とりわけ、教員養成や社会教育士養成課程のなかに位置づけていくことが求められるのではない。また、互惠概念を原理とするサービス・ラーニングは、地域住民やフィールドでの生活者あるいは定住的に活動している人々と相互にエンパワメントし合う関係の構築を目指す実践であり、ソーシャルワークなどの分野においても重要な学びをもたらすと考えられる。そして、その際、本研究において〈緩やかで断続的なゆらぎ〉として概念化したような学びのプロセスを実質化していくためには、授業のなかで1回きりのワークキャンプに参加するというのではなく、複数回のワークキャンプに参加できるような仕組みを整えていくことが求められる。このような仕組みのなかで生み出される新たな学習論の考究が、今後の研究課題となろう。また、大学教育のみならず、小中学校、高校におけるサービス・ラーニングに本研究で得られた知見を活かしていくことも今後に残された課題である。

次に、ワークキャンプの生涯学習としての可能性を探っていくことも今後の研究の方向性として考えられる。現在、日本の高齢化率は30%に迫る勢いであり、高齢者の学習ニーズに応えた社会環境の整備は喫緊の課題となっている。他方、ワークキャンプは、そのプログラムの大部分を肉体労働が占めており、専ら身体が健康な青年を対象としたボランティア活動として発展してきた。前述のとおり〈緩やかで断続的なゆらぎ〉を特徴とするワークキャンプは、ワークキャンプへの多様な立場での参加を可能にする〈多層性〉、対話的な関係によって担保される〈多声性〉によって促進される〈ゆらぎの相互作用モデル〉として捉えることができる。こうした仮説に基づくと、多様な世代の参加を可能にするワークキャンプは、プログラムにおける〈多声性〉を高めていく上で、重要な意義をもつと考えられる。また、近年、障害者の生涯学習の機会を拡充しようという機運も高まっている。義手や義足、補聴器や車椅子といった補装具あるいは近年発達が著しいICT技術なども積極的に活用していくことで、老若男女、障害の有無に関わらず、あらゆる人々が参加できるインクルーシブなワークキャンプの構造やそこで生起する学びのプロセスを明らかにしていくことができるのではないだろうか。

さらに、現在求められる共生社会および持続可能な社会づくりに向けた学習論研究として、本研究を発展させていくことも大きな課題である。共生社会の実現および持続可能な社会づくりに向けた学習論として、近年、学習者の「当事者性」に注目した学習論が構築されている。学習者の「当事者性」をめぐる学習論においては、他者との相互交流のなかで、ある社会問題を自分ごととして捉えていくためのプロセス、あるいは、他者の抱える問題と自身の抱える問題を交差させるなかで、それぞれの「当事者性」を高めていくプロセスが模索されてきた。本研究で論じてきたワークキャンプの学習論としての〈緩やかで断続的なゆらぎ〉は、他者との相互作用のなかで緩やかに〈ゆらぎ〉を受け止めるという点に特徴がある。こうした意味において、ワークキャンプは、学習者が〈ゆらぎ〉を受け止めるための小さな成功体験を経験するための場として捉えることもできよう。こうしたワークキャンプの実践は「当事者性」の意識化あるいは交差を生み出していくプロセスにおいても、重要な意義をもちうると考えられる。

あらゆる人々が相互に学び合いながら持続可能な社会づくりの主体となっていくためには、異なる価値観やライフスタイルの摩擦や葛藤から生じる〈ゆらぎ〉を受け止め、互惠的な関係を紡いでいくことが求められる。「当事者性」概念を機軸とした学習論に、ワークキャンプにおける〈ゆらぎの相互作用モデル〉を接合していくことで、共生社会および持続可能な社会づくりに向けた学習論・運動論をさらに発展させていくことができるのではないだろうか。

論文審査の結果の要旨

氏 名	堤 拓也		
論文題目	ワークキャンプのサービス・ラーニングとしての意義と課題		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	松岡 広路
	副 査	教授	津田 英二
	副 査	准教授	稲原 美苗
	副 査	准教授	井口 克郎
	副 査	准教授	清野 未恵子
要 旨			
本論文の目的は、サービス・ラーニングと連動したワークキャンプの学習論上の意義と課題を考究することと設定されている。 第1章では、サービス・ラーニングに関する文献研究（主として、Barbara Jacobyによるサービス・ラーニングの定義）を通して、その概念を「学生の学びや成長を増進するような意図を持って設計された構造的な機会に、学生が人々や地域社会のニーズに対応する活動に従事するような経験教育の一形式」と定義し、続く第2章では、国内の大学におけるサービス・ラーニングを研究対象とした先行研究のレビューおよび事例分析を通して、大学教育に求められるサービス・ラーニングの構造を指し示している。第3章では、先行研究をもとに学生セツルメントとワークキャンプの異同を検証し、両者の比較を通して、参加者の〈ゆらぎ〉、活動の期間、活動後の経験や出来事を学習論研究に必要な観点として論じている。 第4章から第6章では、ボランティア活動における参加者の〈ゆらぎ〉等を観点とした実証研究として、筆者が10年来参与観察を続けるワークキャンプにおける参加者の学びが分析されている。第4章では、学習者の学びの契機となる〈ゆらぎ〉を「学習者がこれまでに身につけてきた思考・行動様式および基盤（すなわち「生活世界」）が不安定な状態になること（「ジレンマ」の感覚生起）」と定義し、そこから派生する学びの要素として「学習者の思考・行動様式および基盤に関する批判的自己省察や、学習者に影響を与えてきた社会様式への気づき」を理論的に導出している。また、参与観察、インフォーマル・ヒアリング、インタビュー			

調査によって、ワークキャンプに内在する多様な学びの契機と様態が描出されている。ワークキャンプには、参加者の迷いや葛藤からなる多様な学びの契機、すなわち、多層多元的な〈ゆらぎ〉の生成場面が存在すると論じる。第5章では、ワークキャンプ初参加者の〈ゆらぎ〉を分析することを通して、参加者の行動場面の拡張を促す〈三者関係的相互作用〉が重要な意義をもつのではないかという仮説が提示されている。第6章では、より長期的な観点から参加者の学びを捉えるために、複数回参加しているメンバーにインタビューし、運営に近い立場で参加しているメンバーは、活動中に〈ゆらぎ〉を受け止める余裕がなく、〈ゆらぎ〉を意識的あるいは無意識的に留保する状況が生じている可能性を見出す。そして、〈ゆらぎ〉を受け止め、意味づけていくプロセスとして、役割経験を積み重ね続けるだけでなく、一度、特定の役割から解放されるような〈まなびほぐし〉のプロセスが重要な意義を持つのではないかと論じる。さらに、こうした〈まなびほぐし〉を促進するための具体的な方法として、複数回のワークキャンプに異なる役割をもって参加したメンバー同士による相互のインタビュー（ピア・インタビュー）やワークショップ、あるいは、異なるフィールドのワークキャンプに異なる役割をもって参加することなどが実践的に有効であると論じる。

第7章では、ワークキャンプの学習論として〈緩やかで断続的なゆらぎ〉という概念を提示する。これは、ワークキャンプ参加者が、当該ワークキャンプの最中あるいは事後直近ではなく、一定の期間を空けてその役割から解放された状況下において〈ゆらぎ〉を意味づけていくプロセスを断続的に繰り返す一連の学びのユニットのことである。〈緩やかで断続的なゆらぎ〉を特徴とするワークキャンプは、ワークキャンプへの多様な立場での参加の様態である〈多層性〉、対話的な関係によって担保される〈多声性〉を要素とする〈ゆらぎの相互作用モデル〉を内包する実践であるという。ワークキャンプ参加者のみならず、実践に関わるあらゆる人々に〈ゆらぎ〉の共振を起こし、バルネラビリティ（弱さ、傷つきやすさ）を互いに高め合うこと、すなわち、互惠的な関係を構築するためのレディネスを高めていくことに、ワークキャンプのサービス・ラーニングにおける意義があると主張する。

以上のように堤氏の論文は、サービス・ラーニングと連動したワークキャンプの学習論上の意義・課題を丁寧に整理しつつ、新たなワークキャンプ実践の可能性を提起するものと評し得る。本審査委員会は、学位請求者である堤拓也氏に、博士（学術）の学位を取得する資格があることを、全会一致で認めるという結論に至った。

なお、学位申請者は、本研究にかかわる下記の審査付き論文を発表しており、博士学位申請の基本的要件を満たしている。

- A. 堤拓也（2022）学生セツルメントおよびワークキャンプに関する研究の課題と展望—ボランティアの学びに注目して—，神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要，15(2)，p.39-51
- B. 堤拓也（2022）ワークキャンプにおける多層多元的な学習構造の意義—参加者のゆらぎの生成プロセスに注目して—，日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要，38，p.76-89
- C. 堤拓也（2022）ワークキャンプにおける複数の役割経験から生じるゆらぎの意義—まなびほぐしのプロセスに注目して—，日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要，39，p.114-128